

左宗棠篆書四屏からの制作

河内 利治(君平)
Toshiharu (Kunpei) Kawachi



(図) 左宗棠篆書「漢書揚雄伝四屏」

技術の鍛錬には歳月を要する。知識の蓄積でもある。しかしく
ら技術の鍛錬と知識を積み重ねても、「修養」する心を持たないと、
形式(技術)と内容(知識)が骨肉化しない。言い換えれば、書が
自分の物にならない、自分の書にならないのである。「書者、心画
也。」——これは中国前漢の思想家、揚雄(B C五三〜A D一八)
の著書『法言』にある名言だが、「修養」する心を持たないと、書
にならないのである。

この揚雄を調べていたら、左宗棠(一八一二〜八五、字は季高、
号は老亮、湖南湘陰人)が『漢書』揚雄伝第五十七上(参照
<http://www.fanw8.com/guwen/hanshu/chuan/12111.html>)の一
節を、小篆体で見事に書き上げた四幅の作品(図版)に出会った。
「同治甲子三年(一八六四)四月書」と落款にあることから五十二
歳の作である。

左宗棠は、清朝末期の著名な大臣で、太平天国の乱の鎮圧に活躍

し、洋務派官僚としても有名であり、中国では「清代最後の黒柱」と非常に高い評価を受けている。道光十二年（一八三二）の挙人となるが、三度の礼部試験に落第し、家で経世の学問をすること十数年に及んだ。咸豊・同治年間に、四品京堂統軍となり、のちに天山南北路を平定して総督となり、東閣大学士を拝した文官である。

【図版釈文】①昔者大禹任用益虞而上下和、草木茂。成湯好田而天下用足。文王囿百里、民以為小、斉囿四十里、民以為大。裕民之與奪民／②也。武帝廣開上林、南至宜春、鼎胡、御宿、昆吾、傍南山而西、至長楊、五柞、北繞黃山、灑渭而東、周袤數百里。穿昆明池象滇河、營建／③章、鳳闕、神明、駮姿、漸臺、泰液海水周流水方丈、瀛洲、蓬萊。游觀靡、窮妙極麗。故二帝王之所宮館、臺榭、沼池、苑囿、林麓、藪澤、財／④足以奉郊廟、御賓客、充庖厨而已、不奪百姓膏腴穀土桑柘之地。女有餘布、男有餘粟。

『左宗棠全集（全十五冊）』（岳麓書社、二〇一四年）から「同治甲子三年（一八六四）四月書」を探しているのだが、現在のところ該当記事が見当たらない。同全集第十五冊「附冊」に「左宗棠年表」があり、同治三年三月（旧曆二月）の項に「数上書總理衙門、籌議撤遣外国雇軍、常捷軍、等。并說…将来經費有出、当因仿

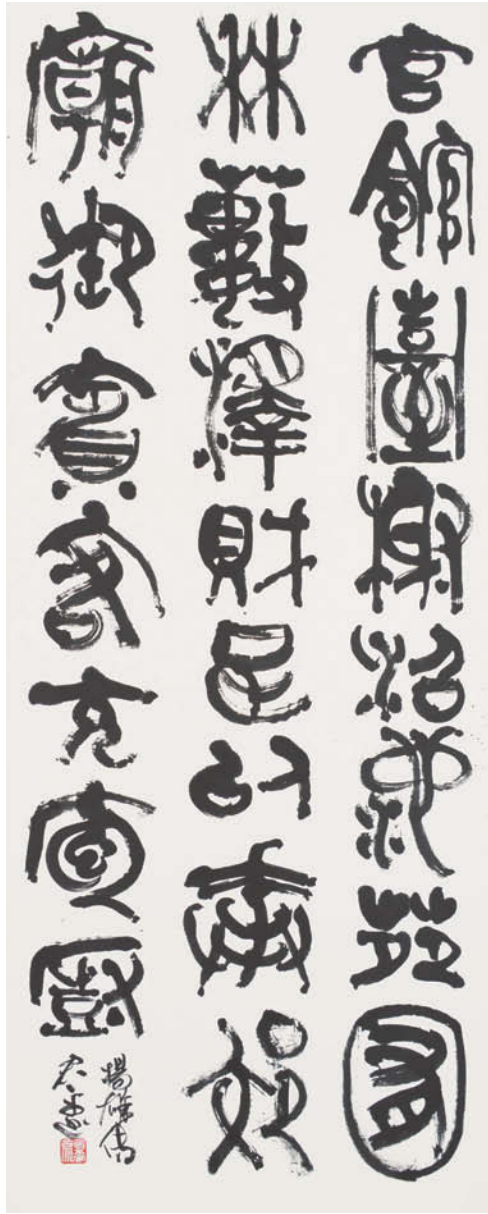
制輪船、庶為海疆長久之計。」とあり、次が五月五日（旧曆三月十八日）「清廷命補授閩浙總督、仍兼署浙江巡撫。……」で、その次が六月十一日（旧曆四月二十五日）「大平軍石達開部、在四川大渡河紫打地、全軍覆沒。」とあるだけである。今後の研究に期したい。

拙作は、左宗棠のこの篆書四屏から、「宮館、臺榭、沼池、苑囿、林麓、藪澤、財足以奉郊廟、御賓客、充庖厨」の文字（③から④にかけて）を、単宣（紅星牌）縦六尺×横二・六尺（縦形式）に書いたものである。実は最初、二層夾宣（紅星牌）縦二・六尺×横六尺（横形式）に七行で「宮館、臺榭、沼池、苑囿、林麓、藪澤、財足以奉郊廟、御賓客」までを数枚書いてみたが上手く行かず、思い切って縦形式に換えてみたらスナナリと収まった。それが拙作である。しかし考えてみれば、縦への三行のベクトルは、本来篆書体を持っている章法だから当然と言えば当然である。もともと左宗棠の書は、縦横をきれいに並べ、均質の柔らかな線條で仕上げ、堂々とした格調高き趣をもっている。この風格は「修養」する心を持つものでなければ、おいそれと到達できまい。拙作は字形も線質もアレンジし、字の大小、線の太細と曲直と潤渴の変化をつけてみた。「奉」字の小篆は「奉」であり、左宗棠が書き誤った可能性もあるが、拙作ではそのまま書いた。（なお「奉」字を小篆体にして、さらに横形式で書き上げたのが「改組第2回日展」作品である。）

教え子に合うと、決まって「学生時代にもっと勉強しておけば良かった」という話が出てくる。さらに「初心に帰って書を勉強するにはどうすれば良いでしょう」との相談も受ける。卒業して十年ほど経って、真剣に書と向き合えば向き合うほど、技術と知識の不足を感じるからであろう。どのような技術の鍛錬も知識の蓄積も、常日頃から向上心を持ち、積極的に自分のものにするよう心がけるほかに近道はなかるうし、かく言う私もそのように心がけてはいるものの、なかなか思うように向上しないのだから、ライフワークとして取り組んでコツコツと地道に続けて行くしかないと思っている。かれこれ筆を持ち続けて五十年を数え、篆書の勉強に限ると四十年弱になるが、大学時代は情けない話だが呉讓之を臨書したことしか思い出せない。教え子が「もっと勉強しておけば良かった」と言うとおりである。

はじめて篆書作品を発表したのは大学四年生の時、今井凌雪先生から習った「鄂君啓節」の臨書（横二尺×縦八尺、二〇字×六行の全百十六字）であった。留学中には沙孟海先生から『説文解字』を引いて、「唐詩」「詩経」「韓愈石鼓歌」などの詩歌を毎週一首、小篆体にする宿題を二年間続けた。私の篆書の骨格、古文字の基礎は、この時期に身についたと思っている。あるとき、小篆の宿題をノートに鉛筆ではなく、画仙紙に筆で書いて沙老に見せたところ、「没

有修養的人、不要写字。」と嗜められた。今では、この言葉が座右銘となっている。「修養」とは「修身養性」の謂いであり、そのためには学問を積み重ねなければならない。「学問」とは、文字通り学び問うことであり、読書することである。読書して古人に学び問う、今自分を学び問うことである。われわれは書を学問の中心に据える以上、書を通して学び問いながら人間形成することになる。書が先ではなく、学び問うことが先にある。学び問うた結果として書がある。そう考えると、おいそれと筆が持てなくなるが、最近少しか「身を修め性を養う」の意味合いが体感できるようになってきた。「人書俱老」を少しだけ実感するようになったということであろうか。



172×69cm

宮館、臺榭、沼池、苑囿、
 林麓、藪澤、財足以奉郊
 廟、御賓客